

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	芳川 史嗣
論文担当者	主査 石原 正治
	副査 新村 健
	副査 小山 英則
学位論文名	Follow-up of Diagonal Branch Bifurcation Lesions Treated with Left Anterior Descending Coronary Artery Stenting (分岐部病変における左前下行枝へのシングルステント留置後の対角枝の検討)
論文審査の結果の要旨	
<p>経皮的冠動脈形成術（percutaneous coronary intervention: PCI）は冠動脈の狭窄を解除する方法として普及しているが、分枝を含む病変（分岐部病変）に対する治療戦略については議論がある。本研究で申請者らは冠動脈の中でも特に重要な血管である左前下行枝（left anterior descending artery : LAD）の対角枝分岐部病変に対するステント留置後の分枝へのバルーン拡張（kissing balloon technique: KBT）の必要性を検証する目的で、LAD 分岐部病変に対する PCI を KBT 有無に分け長期成績を後ろ向きに解析した。対象は 2006 年から 2012 年の間に、対角枝をまたいでステントが留置された LAD 分岐部病変患者 51 例とした。6-9 か月後に follow up 冠動脈造影検査を行い対角枝入口部の狭窄度の進行・改善を評価した。その結果、LAD へのステント留置後、35 例で 90%狭窄を認めたが、follow up 時に完全閉塞した症例は認めなかった。PCI 後対角枝が完全閉塞か 99%狭窄で造影遅延のあった 15 例中 8 例で、follow up 時に開存し狭窄度は改善していた。本研究より、PCI 直後に分枝の入口部に有意狭窄を認める場合であっても分枝へ KBT の追加は必ずしも必要ないことが示唆された。本研究の成果は分岐部病変に対する PCI の治療戦略を考える上で有意義な知見であり、学位授与に値すると評価した。</p>	